

協同総研に期待するもの

中田 宗一郎（日本労働者協同組合連合会副理事長）

協同総合研究所はこれまで、協同集会、雇用シンポのコーディネート、教科書の作成、パーク・マクファーソン報告の翻訳、迅速な海外情報の提供、ヘルパー、リサイクル、高齢者問題等での政策づくりなど連合会にとってなくてはならない存在となっています。

5月21～22日に開催された、連合会第16回総会が策定した第2次中期計画の実現のためには、研究所の、これまで以上の役割りの発揮なくしては不可能といって過言ではないとの思いをこめて期待を述べさせていただきます。

連合会の第1次中期計画（90/4～95/3）は、基本目標を、

- ① 労働者が企業の主人公となりうることを実践的に証明する。
- ② 労働者協同組合が発達した資本主義国でも可能であり、社会や労働にとって積極的意味を持つことを事実で示す。
- ③ 社会的評価をうる最小単位として就労組合員5万人、事業高1千億円を達成する。

として、はじめに計画を立て、目的・意識的なりくみを、七つの原則と、協同組合の理念・原則を守ってすすめてきました。

国の内外、政治・経済、あらゆる分野にとっても節目の年であった1995年に、日本の労協運動が到達した高みに立つことで見えてきたものは、

①グローバルに激動する社会・経済の荒波が日本をも飲みこんで、雇用・賃金・価格破壊が尖鋭的にすすみ、ヨーロッパで形成されつつある公共、営利のセクターとは異なる第三のシステムとしての「社会的経済」のシステムが、日本においても好むと好まざるとにかかわらず形成されていくに違いないこと。

②阪神大震災は、「サリン・オーム事件」が絶

対許すことのできない悪行であって強い関心を呼ぼうとも、この大災害とその復興過程は、すべての日本国民に、地域と日本全体の経済・社会、そして政治のあり方を根底から問いかけ、労協の真価が試されたことでした。

この、グローバルで、国民的課題であるからこそ、私達は、それらの根源に向って、抜本的で革新的に挑戦課題として位置づけ、共に切り拓く仲間のセクターづくりと仕事おこしを愚直に追い求めて、協同を問う集会を呼びかけ、連続シンポジウム「雇用不安と労働の未来」を組織し、国際交流をすすめ、建設労働者協同組合を創設し、高齢者協同組合を本格的にスタートさせてきました。

連続シンポジウムと94年協同集会の成功は、その主体となる勢力の形成が、着実に力強さを増していること、その勢力の有力な一部分として労協が大きく成長していくことを時代が求めていることを実感させてくれました。

農事組合・無茶々園、つげの地域総合協同組合（準）、パラマウント製靴共働社、C&Cが労協連に加盟してくれたことが、95年の節目の意味を象徴して余りある嬉しいことでした。

総会は、第2次中計を「非営利・協同の大連合を日本の変革の力として」・「生命・労働・地域の再生を協同の力で」をスローガンに、これまですすめてきた労協の運動・事業・経営のすべてを刷新し、この課題への挑戦を中心任務として掲げました。

この第2次中計が掲げた中心任務、基本目標と、基本観念にそった活動が成功的にすすむ上での決定的な保障が、研究所とのこれまで以上の協力関係の発展にかかっていると考えています。

第2次中計は、以下の4つの基本目標の下に、

事業高1千億円、組合員5万人を、2,000年3月には達成することを数値目標としました。

4つの基本目標は、

- ① 大量失業と人類の危機に抗し、「生命・労働・地域の再生」をめざして、あらゆる領域に労働者協同組合を確立し発展させる。
- ② 働く者が真に主人公となって、労働者協同組合の内実をつくりあげ、社会の共感と合意を得て、新たに法と制度をつくりあげ、持続的で壮大な発展を期す。
- ③ 高齢者協同組合を全国に設立し拡大して「高齢者社会」を人間らしい社会づくりへの転換点とする。
- ④ 「生命・労働・地域の再生」のために活動するすべての人びとと手をむすんで、「非営利・協同の大連合」の形成にむかう。

この任務をやりあげるために、守っていく基本観点を4つ立てました。

- ① 原則の重視（レイドロウ報告、ベーク報告から学び、ICA原則改訂を視野に入れる）
- ② 全組合員経営の貫徹（主人公への組合員の成長こそが発展の原動力）
- ③ 事業能力の向上、非営利・協同との連帯、公共との新しい協同
- ④ 世界の協同組合運動との連帯

上述した第1次中計の基本目標と比べて、第2次中計が如何に意欲的で壮大なものが解っていただけだと思います。

運動の当初、「成功するはずがない」と言われた「労協という妖怪」が、21世紀には法と制度の制定を伴って社会的認知をえるであろうという決意表明でもあります。

「決意」におわることなく現実とするための旺盛なとりくみを励まし援助していただくことを重ねておねがいます。

連合会は、研究所と共に力を合せてすすめてきた4年間の貴重な活動をふまえ、財政・人材の両面からも思いきった強化方針をもってとりくみます。

時代がグローバルに、持続可能な社会、のた

めの新しい枠組みの追求という根源的テーマをめぐって激動しているとき、この第2次中計が順風満帆、平坦に進むとは思っていません。

グローバルに考え、ローカルに実践する、このテーゼは、連合会の原則の一つである「全国観点」の立場でもありますが、事業の拡大・発展は、ときには、「私物化」の衝動や、自分のカラにとじこもり「我流」におち入る危険とのたたかひを必要とするかも知れません。

協同組合運動の理念・原則を実践で検証しながら、時代の要請に応えた、思い切った発想と行動、多彩な行動や行事を、全国観点、全県的視野ですすめることができるかどうか、発展か停滞・衰退かの分水嶺となります。

この課題をとく鍵が、全県での高齢者協同組合のスタートと、研究所活動の県・ブロックレベルでの展開だと考えています。

協同集会・雇用シンポの県・ブロックでの具体化がこれを促進することになり、事業団・高齢者事業団の内実を本物の労働者協同組合にしていくことになるものとしてとりくみを強めたいと思っています。

これらの提起とおねがいは、学者・研究者と実践家のこれまで以上の協同組合方式による研究所活動によって深められ、実現に至るのだと思います。

そして、そのとりくみの総体が、研究所のすぐれた実績となって、日本に於ける労働者協同組合と新しい協同組合運動を大きく発展させる上での最良のシンク・タンクとなっていくものと思います。

遠くない将来には、研究所から、すぐれた有能な人材が労協や新しい協同組合へ派遣され、逆に単位・労協から、人材が研究所で研修を受けることになるような、日本でも有数の研究所となることを期待し、そのためにも連合会あげて力を合せて努力することを申し上げて研究所への期待とさせて戴きます。